



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	An Investigation into the Effectiveness of Strategies for Reducing Student Language Anxiety [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	藤井, 聡美
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12896号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/67402
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Satomi_Fujii_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：藤 井 聡 美

学位論文題名

An Investigation into the Effectiveness of Strategies for Reducing Student Language Anxiety (言語不安を解消するための効果的なストラテジーに関する考察)

本研究の目的は、第2言語学習者の言語不安を低減させる効果的な方略を探索することである。この目的を遂行するため、1) 言語不安を低減させる方略の概念化、2) 教育介入を通じた言語不安を低減させる効果的な方略の探索、3) 学習者の言語不安の強度の変化と不安の原因の検討を行った。本論文は、7章からなり、参考文献と2点の付録がつけられている。以下、各章の内容を記述する。

第1章では、本論文の序論として、研究背景、目的、意義を説明している。言語不安は「スピーキングやリスニング、学習場面での第2言語や外国語環境ととくに結びついた緊張感や不安」(MacIntyre & Gardner, 1994)と定義されている。これまでの研究により、言語不安は第2言語の学習や運用において負の影響を与えることが示されてきている。したがって、言語不安の低減は学習者、教師双方にとって重要事項であり、本研究では日本人英語学習者を対象としてそのための方略を調査し、効果を検証するとしている。

第2章では、言語不安に関連する先行研究のレビューを2節に分けて行っている。第1節では不安について伝統的心理学、スポーツ心理学、臨床心理学の視点から理論的に考察している。不安は脅威を予期して心配する落ち着かない気持ちであるという。恐怖が比較的はっきりした危険を認知したときの情緒的反応であるのに対して、不安はなぜそう感じているのか漠然としていることが多いという。不安がパフォーマンスを低下させる要因であることは広く知られており、スポーツ心理学ではとくに注目されてきた。高不安の競技者は筋肉が不要に活動したりエネルギーを損失したりすることや、身体的・認知的な緊張が負の思考サイクルをもたらすことが明らかにされてきており、パフォーマンス向上のために情緒コントロールの技能習得が重要視されている。また、臨床心理学では社交場面における不安の研究も進められてきており、社交不安に対するセラピーも開発されてきている。

第2章の第2節では、第2言語習得研究の分野での言語不安に関する先行研究をまとめ、言語不安の概念、言語不安の原因、言語不安の影響、言語不安に対処するための方略、言語不安を低減させるための教育介入について考察している。前節で見たように、一般的な不安の低減を目的とした技能やセラピーの開発が行われてい

るように、第2言語のパフォーマンスや学習における不安の低減へ向けた方略の研究も第2言語習得研究の1分野として行われてきているが、効果検証や学習者・教師に対しての具体的な提言がまとまっているわけではない。著者は、この節の最後に考察に用いた52本の先行研究の概略と上記5つのどの項目で貢献が認められるかを分類し、一覧にまとめている。

第3章では博士論文全体に係る研究デザイン、研究課題、および本研究で取った研究方法について記述している。第2章の先行研究のまとめを踏まえたうえで、本研究では言語不安の概念化と言語不安方略尺度の開発、言語不安低減へ向けた教育介入による効果検証、言語不安の強度の変化と原因の検討を研究課題とするとしている。それぞれの研究課題を研究1、研究2、研究3に分け、質問紙調査と因子分析、準実験調査、cycle coding methodを用いた質的分析などを用いてトライアンギュレーションを試みる混合研究法により言語不安の低減を目指した提言を行うとしている。

第4章では、研究1の報告を行っている。複数の先行研究の言語不安に関する記述をもとに、どの方略が言語不安低減に役立つと思っているか尋ねる項目を作成し、その質問紙をAnxiety-reducing Strategy Scale (ARSS)と名付けた。因子分析から1) 他者との協力、2) 自信の構築、3) 教師の支援、4) 精神的負担の少ない指導法の4因子が抽出された。前者2つを学習者による方略、後者2つを教師による方略に分類した。さらに、言語不安の強度を調べる既存の質問紙、Foreign Language Classroom Anxiety Scale (FLCAS)を用いて学習者を高不安群と低不安群に分け、それぞれのグループで4因子の相関を調べた。結果は、低不安群ではすべての因子間に有意な相関がみられたが、高不安群では他者との協力と教師の支援、自信の構築と精神的負担の少ない指導法のそれぞれの間にしか有意な相関は見られなかった。以上から、方略間の関連を薄いと感じている学習者が言語不安が高い傾向があり、学習者・教師両者の側からの方略使用が言語不安の低減には重要であることが示唆されているとしている。

第5章では、研究2の報告を行っている。1学期間15週間の大学1年生50人に対する英語によるプレゼンテーションを伴う英語授業の中で、研究1で行った質問紙調査をもとに上述4因子に相当する言語不安低減のための方略を含んだ教育介入を行い、その前後にFLCASとARSSの2種類の尺度を用いた質問紙調査を実施した。FLCASの総得点の平均をT検定により前後で比較し、言語不安が低減したかどうかを検証した。結果は、教育介入実施後に言語不安の有意な低減が見られたとしている。また、どの方略が効果的かについては、ARSSの項目別の前後による比較や、自由記述回答に対する質的分析から、ペアやグループによる活動、およびペアでのプレゼンテーションが効果的であったとする結果が出たと主張している。

第6章では、研究3の報告を行っている。研究2では統制群を用いていなかった。そこで、研究3では、異なる大学の1年生の英語授業を統制群としてデータを収集した。授業内容が異なるため非同値統制群(non-equivalent control group)を用いた疑似実験調査となる。学期前後でFLCASおよびARSSを用いた質問紙調査を実施して、そこで得たデータを研究2のデータと分散分析を用いて比較した。FLCASSの総合点

では有意な違いは見られなかった。しかし、FLCAS の項目の下位分類の一つであるコミュニケーションへの不安においては、実験群の前後の減少が統制群の前後の減少よりも有意に大きかったことが示された。また、言語不安低減の原因となる項目が教育介入の前後で変化するかどうかを調べるため、ARSS のそれぞれの項目について、群別に前後の変化をウィルコクソンの符号付順位和検定を用いて検討した。統制群においては不安原因としての指数が有意に低減した項目は 7 項目であったが、実験群においては 15 項目であった。このことから、教育介入が行われた場合、言語不安の原因が低減する傾向が高いことを示していると主張している。

第 7 章では、本研究の総合考察として、著者は以下の主張を展開している。これまでの第 2 言語習得研究における言語不安の研究では、学習者の側からの不安低減方略や教師の側からの不安低減支援のどちらかを取り上げる場合が多かった。本研究では、両者を取り上げ、そのなかでも他者との協力、とくにグループによる活動やペアでのプレゼンテーションが効果的な方略であることが示された。協調的な学習風土を構築することが教師にとっては言語不安の少ない英語授業を実施するうえで重要であることを示唆しているとしている。